



 巻 頭 言

論文の有効性

石井 治*

論文を書いて投稿するからには、少なくとも何かしらオリジナルな部分があって、それをひとに読んでもらいたいということだろう。論文が掲載されること自体が目的で、あとはどうでもいいという人があったら論外である。

けれども、読んでもらうのにどういう人を想定して、どういうことを期待するかとなると意見が分れよう。なるべく多くの人に読んでもらいたいのは人情だとしても、多いこと自体が目的になると、ジャーナリズム、マスコミに近くなる。大向うの受けをねらったスタンドプレーというの、時には学問・技術の世界にもあるらしい。

しかし、そのオリジナリティーが、狭い範囲の読者にしか結びつかない場合はどう取り扱うべきなのだろうか。スタンダールは自作の小説の最後に、“To the happy few”と記した。論文も興味を同じくする人は少ないのが当然である。まして、オリジナリティーのあるものは、すぐに世に認められないのがつねではないか。

しかし、オリジナリティーというものは、ありさえすればよいものか。その質が問題だとして、それはどのようにして判定できるのだろうか。一方、会誌は一般会員の会費をつぎ込んだ公器であることも考えねばなるまい。サーキュレーションは問題でないという人は自費出版すればよい。サーキュレーションは広くありたいが、読者はほとんどあるまい、というのはどうなるか。これが極端になると本文のはじめに書いた、“掲載されることだけが目的で、あとはどうでもよい”というのと紙一重だろう。

読まれたかどうかの一番手っとり早い指標は参考文献に引用されることだろう。他人に正しく引用されるのは著者として嬉しいものである。

ところで本会誌論文の参考文献平均引用数は 10 件弱である。したがって逆にみれば、その程度の回数の

引用をされるのは平均値であって、それほど引用されない論文は‘成績’が悪いくことになる。もっともこれには自分で引用する場合も含まれるから、問題は見かけほど単純でない。ちなみに引用文献は 6 割が英文、4 割が邦文である。

さてつぎに、その引用文献を時間軸に沿ってみると、当年から 9 年前までが 90% であり、12 年前までで 95% になる。このくらいが論文の平均的有效期間らしい。情報化社会の進展とともに、情報の流通はますますその速度を増し、情報の有効期間もますます短縮するのだろうか。

ところで、さらにいうならば、論文はひとに読まればそれでいいかという疑問が出る。‘御意見はわかりました’というのは、実務社会では有効だったと認められない。後発論文に対する有効性は引用文献でわかるとしても、論文相互の問題だけに止まるならば、コップの中ならぬ紙の上の世界だけの話で、実社会から遊離したものとなるだろう。

学術論文について、実社会への影響力を直接問題にするのはあるいは行き過ぎかも知れない。しかし、情報化社会がほんの緒についたばかりの今日でさえ、技術情報の流通形態は著しく多様化してきている。めまぐるしい技術の、一番ホットな現場にいる人は、物を書いているひまなんかないというだろう。それ程でなくても、専門分野の近い人のグループである‘研究会’に最新の（おそらくはまだ完全でない）情報を発表し、報告したら、それをきちんと論文に書き直すのは二重手間であり二番煎じだという気持ちをもつ人はあるに違いない。

その点で‘論文’は、背広にきちんとネクタイをしめたようなもので、どこにでも通用するものの、背広にネクタイばかりが服装でない点も、これからの多様化社会でますますその傾向を強めるだろう。

編集を担当して、迷いがますます深くなった。

(昭和 52 年 7 月 21 日)

* 本会常務理事 電子技術総合研究所ソフトウェア部長